

「英日放送通訳」について思うこと

鶴田知佳子

(東京外国語大学)

かれこれ四半世紀以上、放送通訳といわれる通訳の一形態の業務にたずさわっている。一体、どのくらいの放送通訳者がいるのか？よく聞かれる質問であるが、正確なところはよくわからない。NHK や民放、ケーブルのニュースチャンネルなどにおいて英語から日本語への放送通訳が行われているが、放送通訳者とよばれる人たちは複数の局を掛け持ちしている場合がほとんどである。かく言う私もその一人として、公共放送・民放、ケーブルテレビ局において放送通訳を行っている。放送通訳がおおまかに現在の姿になったのは今から 20 年ほど前である。

他の国で放送されているテレビ番組に通訳をつけて自国のテレビで放送するというのは、別に日本に限ったことではない。ただ日本が世界においてユニークなのは、定時放送において英語のみならず複数の言語からの放送通訳が入った番組が放送されているということだ。

放送時間数が多いところというと、朝 7 時から夜の 24 時まで CNN の番組を同時通訳付きで放送している JCTV(日本ケーブルテレビジョン)。その次に、かつてはロンドンから通訳をつけて放送していたが、2005 年からは東京で通訳をつけている BBC の番組 BBC ワールド、また一日に 3 回ニュースをまとめて放送している NHK 衛星放送がある。時間数は少ないが定期的に通訳をつけて放送しているほかのテレビ局としては、アメリカ 3 大ネットワークの一つである CBS イブニングニュースを火曜日から金曜日までニュースバードの中で放送している TBS のケーブル局と、CNBC の経済番組を早朝放送している日経 CNBC が挙げられる。もともとのニュースを放送している放送局の数でいえば、NHK 衛星放送が最多である。「世界 23 の放送局からのニュース」を通訳付きで放送しているというキャスターのこぼれ話を聞いたことがある人も多いだろう。

定時放送の放送通訳に入っている通訳者のシフト調整は、おおむね各テレビ局に対して通訳者を手配するエージェントが行っている。通訳者は、複数のテレビ局に入っている場合には他の仕事との兼ね合いを考えながら、定時番組のシフトを組む。放送時間帯は早朝から深夜におよぶが、通訳者によって自ずと好む時間帯が違っており、朝型か夜型か、あるいは平日型か週末型かに分かれている場合が多い。そのため、同じ放送局で仕事をしていても、顔をあわせる同僚と、しばらく会わないという同僚とに分かれる。番組によっては 3 人か 4 人で分担するもの、あるいは 2 人で分担するものなどがあるが、ある程度決まったパターンでシフトを入れているという通訳者もいる。

放送通訳者は通訳者の世界の常のとおり、やはり女性が多い。家庭との両立を図り、子どもが小さいときなどは、当然ながら昼間のシフトに希望を入れることになるが、朝、まだ配偶者が出勤せずに家にいるあいだに仕事をできるようにと早朝に特化した働き方をしている場合もある。思い起こしてみると、私が最初にこの仕事のことを知ったのは、配偶者の転勤で当時暮らしていたイタ

リアのミラノから帰国したときに、現地で一緒であった駐在員夫人の一人がこの仕事を始めたことを耳にしたからである。その当時はまさに子どもが小さく、家庭と仕事とを両立するために早朝に特化した働き方を選択していた。今にして思うと、「働き方改革」「一億総活躍社会」が叫ばれるようになるはるか以前から、専門職として仕事をしていく柔軟な働き方を選択していたことになる。NHK 衛星放送において仕事を始めるにあたり、当時試験を受け、無事合格することができたが、私が仕事を開始した1992年に、当時のNHK国際研修室において放送通訳の養成コースが立ち上がることとなった。私はぎりぎりコースに通わずに放送通訳者デビューを果たすことができたが、それ以後はほとんどが同研修室において所定のコースを修了した人たちが担当するようになっている。

定時放送はこのようにあらかじめシフトが組まれていて、通訳者が予定を立てておけるものであるが、他国でも行われているように、特別に注目されるイベントや事件などで放送通訳が付いて放送される特番もあることを記したい。最近の例で注目されたところでは、本年5月にイギリスのハリー王子とアメリカ女優のメーガン・マークルさんのロイヤルウェディング、それに続き6月にシンガポールで行われた米朝首脳会談後のトランプ大統領の記者会見、ワールドカップサッカーの開会式におけるFIFA会長の挨拶での同時通訳が挙げられる。ロイヤルウェディングの放送では、日頃話をしていないような人からでも、ロ々に「放送通訳聴きましたよ」と言われた。このとき一緒に組んでいたパートナーも同じだったそうだ。彼女も、自分が登場した放送通訳の中では知人における「視聴率」が一番高かったと言っていたが同感である。

米朝首脳会談については、「予測がつかない大統領」といわれるトランプ大統領だからこそ、このような会談が急にもちあがり、また急に実現したが、開催場所がどこになるのかなどの憶測から始まり、何度もこの件はニュースの冒頭に取り上げられるくらい話題となった。日本での報道についても、複数の放送局が同時通訳者を手配して中継した。ワールドカップサッカー開会式では、私はインファンティーノ会長のスピーチ部分を担当したが、プーチン大統領がまずロシア語で挨拶したのを同時通訳した後で、FIFA会長が登場したとき、いきなり冒頭ロシア語で挨拶したのをとっさに同僚が助けてくれたのは、よい思い出だ。すべて生放送のときには、外国語が流れているときに日本語音声が出ないという穴をあけることをしてはならない。

報道の一部としての扱い

放送通訳者とは、ニュースを聞いている視聴者にはどう届いているのだろうか。定時ニュース番組の放送通訳者の音声はあたかもニュースの一部となっているかのようだ。放送通訳者は言うならば、欧米の英語ニュースを伝えるキャスター、リポーターなどのジャーナリストのことばを日本語で伝える立場にある。そういう意味では、ジャーナリズムの一部に取り込まれている存在だ。たとえば前出のロイヤルウェディングではBBCの報道を伝えたので、BBCが伝えたロイヤルウェディングをいわば「同時に翻訳」して伝えていた。

一方で、アメリカ大統領のことばを伝える場合は、いわばアメリカ大統領の口になっている。きわめて印象的な放送通訳の仕事の一つが、当時のオバマ大統領による広島演説である。文字通り、一挙手一投足を見守りながら、某テレビ局にパートナーと詰めていた。じゃんけんで勝った私から放送が始まったが、冒頭のことばは、私自身が通訳をするとその言っていることばがそのまま字幕

で画面に出たのである。同じことは他局でも経験したが、一番記憶に鮮やかに残っているのがこの広島演説である。「71 年前のことです」「死が空からやってきました」と私が発話するとそれがそのまま字幕になった。ことばの重みとともに忘れられない放送通訳であった。最近別件で広島に行く用事があったので、この演説が行われた場所や博物館に展示されたオバマ大統領が折った折り鶴も見て感慨をあらたにした。

リアルタイムで伝えるということ

同時通訳で伝える意味は、いまここで起きていることをリアルタイムで伝えることにある。正確に伝えるのであれば、またオリジナルのオバマ大統領のスピーチを聴きたいということであれば、オリジナル音声を聴かせながら字幕で伝える方がオバマ大統領の声の醸し出す雰囲気も含めてより正確に伝えられる。しかし、米朝首脳会談のように、両首脳が何を言うのかを、いま、ここで伝えたいというときは同時通訳になる。

米朝首脳会談では、トランプ大統領の記者会見が始まる前にビデオが流されたということがあり、某放送局に控えていた朝鮮語の通訳者 2 名、英語の通訳者 2 名ともに驚いた。まず朝鮮語でビデオが流れて朝鮮語の通訳者が通訳した後、私ではないもう一人の英語の通訳者が通訳した。この部分は放送には流れなかったものの、ビデオはインターネットで公開されている。余談ながら、このときのビデオのトランスクリプトをグーグル翻訳でかけると、英語から変換した日本語はまったく意味をなさない。語彙と文法、いずれのうえでも日本語にするにはハードルが高いとわかる。ちなみに、英語からイタリア語、英語からフランス語にしてみると問題はほぼなかった。言語間の距離の違いであるとあらためて思った。特に最後の文章がスクリーンに文字でも示されたが、その文章のグーグル翻訳を比較すると違いがはっきりとわかる。

The future remains to be written.

未来はまだ書かれている。

L'avenir reste a ecrire.

Il futuro rimane da scrivere.

ちなみに日本語でも、「未来を書くのはこれからだ」とすれば、意味が通じる。

各自の研鑽

こういうイベントのために、通訳者はどう準備をしているのか。何よりも、常にニュースをフォローしているということである。さらに、トランプ大統領の語彙選択も含めて、適宜語彙にあわせた訳語の選定が行えるように努力をしている。意外に難しいのが地名や人名などの固有名詞である。

結局何をすることも、現場で瀬戸際に立ったときの放送通訳者を救うのは知識と勉強であると常に実感している。たとえばロイヤルウェディングについては、結婚式の前例の DVD を見て、式関係の用語や聖書から出てくる引用は何になるのかを調べた。しかし、調べられなかったのがアメリカから来た司教の挨拶だ。おそらく 5 分くらいの予定であったのだろうが、それが 15 分になった。二人で交代しながらいつ終わるのかと思いつつ訳したが、拾うことができなかったところが二箇

所あった。

Antebellum South

南北戦争前、というのがすぐに出せなかった。

Balm in Gilead

聖書の逸話だが、音は聞こえても音で再現することさえこの現場ではできず、「とばす」ことしかできなかった。現実的な対応として、意味が把握できないと省略せざるを得ない。

今後の課題

最近の放送通訳者はすでに 20 年以上のベテランがずらりと揃っており、新人の入りにくいマーケットになった。私が仕事をはじめた四半世紀前と比べれば、確実にレベルはあがっているといえる。放送通訳の養成講座もあるが、結局は個人の資質と研鑽によるところも大きいように思う。一つ、訓練ができることがあるとしたら、「アナウンサーのように伝える」スキルである。声で伝える仕事で、聴いているのは不特定多数の視聴者というなかで、「心地よく聞こえる声」の鍛錬は必要である。

今でもテレビ局で放送通訳のマイクに向かい、最初のを発するときは緊張する瞬間である。どんなに事前の準備を尽くしても、完全原稿がある場合でない限り(まずその場合は少ないが)100%の準備をすることは不可能だ。そうではあっても、元のテレビ局がその視聴者に伝えようとしたことを、どこまで正確に過不足なく自分の日本語で日本の視聴者に伝えることができるか。しかも、そのときに自分の音声が流れている放送局のことも考えておく必要がある。自分の声が流れているのは、いま仕事をしている放送局のニュースの一環であるということを考えて、常に研鑽を怠らずに正確にわかりやすく伝えていきたい。